

石川啄木

——短歌にみる生と死の表現——

福田 周

はじめに

明治の天才歌人と謳われる石川啄木は、子どものころは神童と呼ばれ、若くして詩人としての才能を発揮し、さらに小説家を目指して上京する。しかし小説家としては大成せず、そこで大きな挫折を経験する。一方、生活困窮のなか「一握の砂」、「悲しき玩具」といった当時としては革命的な歌集を発表する。しかし27歳という若さで、肺結核のため亡くなる。

石川啄木に関しては幾多の研究がなされているが、ここでは早世の歌人「石川啄木」の生涯を、その心理的葛藤の変遷に沿って振り返り、さらに心の内面の葛藤がどのように啄木の作品に影響を与えているのかを啄木の日記や短歌などを取り上げて考えていきたい。

1. 啄木の生涯とその生き方の変遷

ここでは、石川啄木の生涯を主に『石川啄木全集第8巻』の岩城之徳編「伝記的年譜」¹⁾と福田清人・堀江信男編著の『人と作品5 石川啄木』²⁾の内容を引用して、後に述べる啄木の抱える心理的葛藤と深く関連する事項を中心にまとめる。

(1) 生い立ちから学生時代まで

石川啄木の本名は、石川^{はじめ}一といい、明治19年(1886年)岩手県南岩手郡日戸村(現盛岡市渋民)の常光寺において、父一禎^{いつてい}(37歳)、母カツ(40歳)の長男として生まれる。

父は岩手県の農民の5男として生まれ、母が後妻のため菩提寺の曹洞宗の寺へ預けられる。その寺の住職である葛原対月^{かつらはらたいげつ}に師従し、対月の影響を受

けて短歌をたしなむ。対月の寺へお手伝いに来ていた対月の妹工藤カツと相思相愛の仲となる。父は25歳の時に日戸村の常光寺の住職に榮進する。長女、次女、長男（啄木）と子どもが生まれるが、一禎は自身が僧籍であることを慮り、啄木が小学校に入学するまでは、子どもを戸籍上母カツの私生児とした。啄木の兄弟は11歳上の姉サダ、9歳上の姉トラと2歳下の妹ミツである。

啄木2歳（明治20年）の時に渋民村（現岩手県の玉山村渋民）へ転住となる。渋民村の宝徳寺住職が病死し、その後継者がまだ幼いため、代理住職を置くか正式に後任住職を置くかでもめていることを一禎が知り、師対月に働きかけてなかば強引にこの寺の後任住職となる。このことによって檀家が石川派と前住職派に分かれ、その後の石川家の火種となる。

啄木は10歳までこの村で過ごすことになる。生まれながらに病弱な子どもであったが、両親ともに長男である啄木を可愛がり、啄木は我儘いっぱいに育つ。村でも「お寺の一さん」として小貴族のような扱いを受けた。こうした環境が後年の我儘で自尊心の強い性格の基礎を形作ったといわれている³⁾。

啄木数え年6歳（明治24年）で渋民尋常小学校に入学する。本来の入学年齢には1年早かったが、遊び友達がみな小学校に入学したため啄木が寂しがり、しきりに自分も学校に行きたいと父にせがんだ。そこで父は校長に啄木の入学を頼み込み、その結果、特別に1年早い入学を許可される。最終学年の4年では首席で卒業し、村では神童といわれる。啄木10歳（明治28年）で盛岡高等小学校に入学し、成績はいつも2番か3番くらいで、特に作文の才能はずば抜けていた。

13歳（明治31年）となり、啄木は盛岡尋常中学校に128人中10番の成績で入学する。啄木は短歌をたしなむ先輩の及川古志郎⁴⁾に影響を受け、文学の世界に関心を寄せるようになる。及川の紹介で金田一京助⁵⁾を知り、浪漫主義の『明星』⁶⁾に触れ、与謝野鉄幹・晶子の主宰する新詩社の社友となる。中学2年のころ、啄木は後に結婚する堀合節子との初恋を経験する。節子は、啄木より2歳年上で、市役所の役人である士族の父を持ち、比較的裕福な家で両親の寵愛を受け育ち、当時岩手県下唯一のミッションスクールに通う女学生であった。

16歳（明治34年）のときに起きた校内の学生によるストライキ事件⁷⁾

に、啄木も参加する。その他に英語自主学習グループを結成したり、回覧雑誌を発行したりと、学校の勉強よりも恋愛と文学活動にいそむようになる。そのせいか成績もどんどん下がり、登校も渋りがちとなる。啄木自身は後に当時の自分を「本校始まって以来の無類の欠席者」⁸⁾と称している。啄木 17 歳（明治 35 年）、最終学年 5 年生で、このままでは落第必至の状況のなか、試験で特待生の学生にカンニングを依頼し、それが発覚して卒業まで数ヶ月のところで自主退学を決意する。その年 10 月に『明星』にはじめて自作の短歌が掲載され、10 月下旬には上京をする。

啄木の幼少期は、経済的にも精神的にも何不自由なく、お寺の住職のお坊ちゃんとして手厚く養われてきた。小学校入学後は優等生として過ごし、周りからは神童と呼ばれ、別格の存在として扱われていた。しかし、こうした啄木の幼少期の基盤は脆い背景によって作られたものでもある。父の住職就任や小学校入学の幹旋に関するごり押しは、周りからの反発を受け、石川家は真の意味で村人から尊敬され慕われるようなものではなかった。それゆえに啄木に対する周りの態度も、表向きには敬意を払われながらも、裏においては揶揄されるようなものであった。つまり、寺の住職の息子であるという肩書だけに支えられた脆い自尊心をもつゆえに、余計その肩書きにこだわることになるのであろう。そうした自己の存在に係る意識の在り様は、啄木のこの後の生き方にも大きな影響を与えていると考えられる。

その自尊心の高さが顕わになるのは、啄木が中学に入ってからである。啄木は尋常中学校でそれまでの狭い農村の世界から、様々な価値観を持った人々のいる世界と出会う。そして自身のアイデンティティの模索を通して文学に目覚める。それまでの、学校でいい成績をとることや、親の職業によって他者からの尊敬を得られるというアイデンティティの在り方は意味がなくなり、啄木はそれに代わるものとして恋愛、短歌といったものに自己を没入し始める。そこで啄木は詩歌の才能を開花させ、詩人として独り立ちすることを目指す。もともと啄木は言語的な面での知的能力が高いために、啄木はまたたく間に新進気鋭の天才詩人として頭角を現す。

ここでもし、本当に啄木が文学者としてのアイデンティティを志していたならば、この後もう少し違う人生があったのかもしれないが、啄木の場合は純粋に文学だけに没頭することはできず、同時に周りからの名声あるいは絶

対的な評価を求めないといられない心性があり、そうした名声に傷がつくような事態に対しては、現実からの回避を繰り返す。落第という事態を回避するために、啄木はカンニングという不正行為をしたうえ、その行為を反省することをせず、学校批判という形で責任転嫁し、学校が悪いから自分から学校を辞めるのだという屁理屈で自己を正当化する。これによって不名誉な落第による自尊心の傷つきから身を守ることができるわけである。また退学後の啄木の上京行動は、理想に根ざしたものではあるが、現実観に根づいた行動ではなく、必然的に人生の挫折を経験することとなる。

(2) 最初の上京から結婚まで

東京に居を移した啄木は、詩人になるという大きな希望を抱いて与謝野夫妻のもとを訪ねる。そして図書館で勉強をする毎日を過ごす。彼は翻訳で生計を立てるつもりでいたが、健康を害して高熱や激しい頭痛が続き、頼れる人のいない東京で借金を抱えて病床に伏すこととなる。この状況を知った父は、急遽裏山の栗の木を売る約束で借金をし、啄木を連れて渋民村に戻る。この借金は檀家の許可を取らずに行ったため、後にこれがもとで父は村からの排斥対象となってしまう。啄木の最初の東京暮らしは滞京わずかに4ヶ月で終わり、啄木にとっては人生で最初の大きな挫折経験となった。

啄木は帰郷後、渋民村にて静養生活を送りながら『明星』に詩歌を投稿し、この頃より「啄木」のペンネームを使用するようになる。

明治37年(啄木19歳)に節子との婚約が成立する。一方で啄木はアメリカ行きを空想し、また東京での生活を模索する。10月によりやうく東京までの旅費を工面し、処女詩集刊行を目的に上京する。啄木は詩人としてそのまま東京に留まり、妻となる節子と呼び寄せて生活するつもりでいた。しかし、12月に父が宗費滞納の理由で曹洞宗宗務局より住職罷免の処分を受けたとの知らせが届く。これによって一家は宝徳寺を退去することとなった。

啄木は、明治38年5月に20歳で詩集『あこがれ』⁹⁾を刊行する。この作品によって浪漫主義の詩人として一定の評価を受けるが、一方で物真似でしかないという批評も受ける。父が5月に啄木と節子の婚姻届を役所に出し、結婚式の準備を整えて啄木の帰郷を待った。ところが啄木は東京を出発するも、途中仙台で下車し、友人に会うなどして11日間を過ごす。その友人に嘘をついて借金をし、結婚式にはついに現われず、6月になってようやく妻

の待つ新居に現れる。そしてしばらくは、文芸雑誌の編集などをして過ごす。

啄木は上京後、生活を翻訳業で賄おうとしたが、現実には甘くなく、到底稼ぎにはならない。そうした現実でのうまくいかなさが体調不良という形になって啄木を襲う。つまり啄木は人生の挫折を、こうした身体疾患という形で受け入れざるを得なくなる。しかし、体調不良によって啄木は詩人としての職業アイデンティティ確立の問題から一時的に逃れることができたともいえる。つまりこれもまたひとつの現実逃避の在り方であり、また田舎に帰るといことは、以前のアイデンティティのお寺のお坊ちゃんに戻るだけであり、ある程度プライドは保たれることになるわけである。

ところで、父によるごり押しがここでまた繰り返される。父は強引な借金をすることで、ついに石川家の生活の基盤である住職という職業を失うことになる。このことが啄木のこの後の人生に決定的な影響を与えることになる。

再上京後は、詩集『あこがれ』の原稿料で賄えると思っていた節もある。いずれにせよ働くことへの現実感が薄く、それに反比例するように石川家の借金が増えていく。堀合節子との結婚において、啄木は結婚式に出ずに放浪する不可解な行動をとるが、友人に借金をする際に母が危篤であると嘘をついている¹⁰⁾。こうしたその場しのぎの嘘は父がしてきた行動とそっくりである。結婚式に出ないのは、金がないということ、自身がまだ東京において詩人としての独り立ちをしていないことといった無職者への負い目があるためであろう。ここに啄木の自尊心の高さがうかがえる。結婚後は雑誌の編集業をするが、やはり仕事としての現実感が薄く、さらに借金を増やすことになる。

(3) 一家離散から函館時代まで

明治39年3月に啄木は母と妻を伴って、渋民村に帰郷する。帰郷した理由は父の住職復帰の運動を行うためといわれている。啄木は渋民村尋常高等小学校の代用教員¹¹⁾となり、一家を経済的に支える立場となる。放課後に生徒たちを集めて英語を教えたりと教育に熱心に取り組む。その姿勢は、評論『林中書』として残されている。一方、小説家を志望して小説『雲は天才

である』を執筆する。

啄木 22 歳（明治 40 年）のときに長女京子が誕生する。父の懲戒赦免が出たため、当時師の対月のもとに身を寄せていた父が、北海道野辺地から渋民村に戻る。それはもちろん宝徳寺の住職再任をもくろんでのことであったが、結局村の権力争いや生活の困窮から、父は住職復帰を断念し、さらには突如家出をしてしまう。一方、啄木は当初から父の住職復帰の目途がたてば代用教員をやめるつもりでいた。父のこの遁走によって、父の住職再任がかなわなくなったにもかかわらず、啄木は当初の計画通りに 4 月 1 日に辞表を提出した上で、勤務先の小学校においてストライキを扇動し、校長を転任させた。しかし、自身も免職となる。5 月には妻と長女を盛岡の妻の実家へ預け、小樽の姉に妹光子を預けるために啄木は渡道する。これによって石川家は一家離散となった。これ以降、啄木は故郷渋民村に帰ることはなかった。その後啄木は函館で尋常小学校の代用教員となり、妻と子呼び寄せて地元新聞社の遊軍記者となる。しかし 1 カ月後に函館大火のため再び失職する。

渋民村に帰郷した啄木の目的は、第一に父の住職復帰にあった。それによって自身が家族を養うという立場を回避したかったからである。啄木にとって小学校教員という職業は、あくまで「代用」なのである。彼は教員ではなく「詩人」を職業アイデンティティとしている。また、この住職復帰運動にあっても、啄木は村の中に溶け込んで村の一員になろうという意識は毛頭なく、強引な運動を行ったために反発が強まり、せっかく父の赦免が出たにもかかわらず、父自身がそうした村との対立に耐えきれず逃走してしまうという滑稽な結末を迎えてしまう。啄木の当時の日記には、次のような村人たちへの敵意感情が述べられている。

明治 39 年 3 月 9 日　世の中で頭腦の貧しい人だけが、幸福に暮らしている。彼らは真の楽しみというものを知るまいが・・・彼らは立っている、同じところに立っている。真に平気なものだ。その代り、朝生暮死の虫けらと同じく、彼らの生活には詩がない。・・・ああ、もし自分が一瞬たりとも彼らの平安をうらやましいと思うことがあるなら、それは自分にとって最大の侮辱である。¹²⁾

明治 39 年 7 月 19 日 予は 6 月のはじめ 10 日を異様な精神興奮の状態に過ごした。社会と習慣と規則とに対する一切の不平は危うく爆発しようとした。・・・故郷の自然は常に我が親友である、しかし故郷の人間は常に予の敵である。・・・この村の小学校に学んだ頃、神童と人にもてはやされたころから、すでに予は同窓の友の父兄たる彼らから或る嫉視をうけていた。この嫉視は、その後十幾年、常に予を監視している。・・・しかし予は極めて平気であった。鳥がないたり、犬が吠えたからといって、驚くような自分ではない。¹³⁾

ここで啄木は、お寺のお坊ちゃんというこれまで自分を支えてきたアイデンティティの柱を失う。また、啄木は代用教員を辞めるにあたって、再び強引なやめ方をする。これは中学校の時と全く同じで、周りを扇動し、上司（校長）を敵として攻撃し、無責任にも辞めてしまう。つまりは、他罰的に責任回避することで自身の自尊心は傷つかずにすむというやり方である。この葛藤回避の在り方が啄木の今後の人生に繰り返される。啄木は極めてずるい人間であり、弱い人間であるともいえる。

この時期に啄木は評論『林中書』を著しているが、これは代用教員の立場からの教育論であった。その中心となる内容は、教育の目的とは第一に天才の育成、第二に天才的支配者に服従する民衆の育成にあるというものであった¹⁴⁾。評論の中で啄木は当時の教育を批判しているが、この評論を書いた目的は、自身の中学のときの中退の自己弁明にある。かつ、「予は願わくは日本一の代用教員となって死にたい」とまで語り、後輩に自分と同じように中学を中退して代用教員になることを呼びかけていながら、挙句には代用教員を辞めてしまうという、これまた滑稽な結末になってしまっている。啄木はこの時期、詩人としての活動のうまくいかなさから、徐々に「小説家」として身を立てることに関心が向き始めている。

（４）北海道での新聞記者時代から 5 度目の上京まで

啄木は函館を離れ、札幌の新聞社の校正係の職を得るが、知人の誘いを受けて 10 日あまりで小樽の新しい新聞社の記者として単身赴任する。しかし 10 月には上司と喧嘩をして退社してしまい、啄木が職を失ったことで、石

川一家は常に借金の日々となる。

啄木 23 歳（明治 41 年）となり、1 月に釧路新聞社に記者として入社し、小樽に家族を残して再び単身赴任となる。ここでは精力的に記事を書く一方で、芸者通いに明け暮れ、また徐々に上司とそりが合わなくなる。仮病による欠勤が増え、社長より最後通牒を告げられる。啄木は自ら退職をし、4 月に小説家になる決意をして義妹の夫である宮崎郁雨¹⁵⁾の好意で家族を函館に移し、自らは単身東京へ再び上京する。

父の遁走によって、自らは望んでいないが、啄木が一家の主となる。小樽で単身赴任となって働くようになるが、家族への送金はほとんどせず、酒を覚えて遊びに金をつぎ込むようになる。新聞記者としての職業アイデンティティを持ち合わせていないのは教員の時と同様である。早晩これまでの繰り返しで、周りを扇動して上司とのトラブルを引き起こし、自主退職する。これまでと違うのは、自身の職業放棄が自身の問題だけではなく、家族の問題に直結するようになったことである。

釧路においても啄木の責任回避は続き、より破滅的になっていく。釧路の新聞社を辞める直前の啄木の心情が日記に以下のように綴られている。

明治 41 年 3 月 25 日 ともかくも自分と釧路とは調和せぬ。啄木は釧路の新聞記者として余りに腕がある、筆が立つ、そしていて年が若くて男らしい。男らしいところが釧路的ならぬ第一の欠点だ。早晩啄木が釧路を去るべき機会がくるに違いないという様な気がしきりに起こる。¹⁶⁾

3 月 26 日 少しばかり神経衰弱が起こったらしい。立つと動悸がする。横になっていると胸が痛む。不愉快だ。¹⁷⁾

3 月 28 日 今日も休む。今日からは改めて不平病。・・・起きていつて開けてみると、一通の電報。封を切った。“ビョウキナヲセヌカヘ、シライシ” 歩すること 3 歩、自分の心は決した。啄木釧路を去るべし、正に去るべし。¹⁸⁾

釧路時代では、嘘による欠勤が続き、見かねた社長（3月28日の電報を送ったシライシ）が最後通牒をつきつける。しかし、啄木は自身の欠勤の原因を、すべて上司のせいにしてしまう。結局それは自分の落ち度による解雇という烙印を押されることへの回避にすぎない。中学の成績不振を隠す行動と全く同じやり方である。

（5）5度目の上京から朝日新聞記者時代まで

上京後、金田一の援助で下宿を借りて創作活動に入る。小説¹⁹⁾を書き出版社へ持ち込むが、そのことごとくが不採用であった。6月には自殺することまで考え、不眠に悩まされるなか、6月23日から24日にかけて、突如夜を徹して短歌創作をする。啄木の日記にはその日の様子が記されている。

6月24日　昨夜枕についてから歌を作り始めたが、興が刻一刻にさかんになってきて、ついつい徹夜。夜が明けて、本妙寺の墓地を散歩してきた。たとえるものもなく心地がすがすがしい。興はまだ続いて、午前11時ころまで作ったもの、昨夜百二十首の余。²⁰⁾

6月25日　頭がすっかり歌になっている。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の2時までに百四十首作った。父母のことを歌う歌約四十首、泣きながら。²¹⁾

明治42年3月（啄木24歳）に、東京朝日新聞社に入社する。北海道に残された家族から再三の上京の催促と借金に迫られながら、啄木は一方で浅草をさまよう生活を送る。家族を養うためだけの仕事生活から逃れるために、啄木は5度目の上京をする。友人の援助に丸ごと支えられての行動であり、これも学生時代の父から援助を受けて上京した状況と全く同じである。一方で職をもち、他方で作家として執筆を続けるという二重生活ができない啄木は、執筆活動一本に絞る生活を始める。もちろんその間の収入はないので、自然と借金が増えていく。しかし、書いた小説が自分の自信とは裏腹にまったく評価されない。作家としての職業アイデンティティが実現しないまま、家族からは東京での同居の催促が再三来ようになり、そのプレッシャーから逃れるために芸者通いにあけくれ、いつしか小説自体が書けなく

なる。啄木は小説が書けない気持ちを日記に次のように記している。

5月12日 朝から頭に加減が悪くて、昼までにたった3枚しか書けぬ。・・・はてしもない空想に耽った。雲に乗るように空想に乗って、ズーッと天に上って、ドサリと落ちる。そのときの気持ちの悪さ。・・・つまり頭の疲れのせいだと思い返して寝る。何ということもなしに頭がくさくさする。²²⁾

追いつめられた啄木は、次の日記の通り、ついに自殺願望を口にするようになる。そしてまた焦るという悪循環に陥ってしまう。

6月29日 うつらうつらと枕の上で考えて、死にたくなった。死というほかに安けさを求める工夫はないように思える。生活の苦痛！それも自分ひとりならまだしも、老いたる父は野辺地の居候、老いたる母と妻と子と妹は函館で友人の厄介！ああ、自分は何をすればよいのか。²³⁾

7月23日 死にたい。・・・自分は真の真面目になれぬという苦痛を語った。悲哀とか苦痛とか、自分らはそれを詩化し、弄ぶくせがあつて、悲哀の底苦痛の底にある“真面目”というものに面相接することができぬ。自分は毎日心暗く、何の張合いもなく、何もせず悲しんでばかりいるし、身に迫る痛感のために、死のうとばかり考えているが、しかしながら、それでもまだ真に真面目に触れていないような気がしてしょうがない。・・・自分はすべて、一切、ありとあらゆるものが、苦痛だ。自分自身が苦痛だ。²⁴⁾

こうした苦痛を感じ、死の願望を口にする一方で、不思議なことに突然短歌が自生してくる。これは啄木が小説を書いている時とはまったく異なる次元での創作活動である。ただ、この時点ではその創作が自身の価値と結びついていないために、自身の人生の悪循環に対しては何の解決にもなっていない。

そしてついに、啄木は再び新聞記者という仮の職業を選択する。ただし、今回はこれまでと違い、もっとも親和性の高い短歌に係る仕事であったこと

が意味があったのであろう、これまでの仕事の中でこの仕事だけは最後まで投げ出さなかった。

（6）家族の上京と長男の死まで

明治42年6月、ついに待ちきれない母と妻子が函館から上京する。妻節子は函館時代の無理がたたって体を弱らせ、母との関係もうまくいかなくなり、10月に京子連れて家出する。啄木はそのことに精神的にショックを受ける。また、家出していた父も野辺地より上京し、家族が再び一緒になる。

この年の11月に『食うべき詩』等の評論を発表し、さらに明治43年（啄木25歳）になると歌集の編集をはじめ、朝日新聞において朝日歌壇を創設してその選者となる。同年に大逆事件²⁵⁾が起こり、それを大きな転機として啄木は社会主義に関心を寄せ、いくつかの評論を執筆する。10月には長男真一が生まれるが、病のため生後24日で亡くなる。啄木は12月に長男の葬式費用を捻出するため歌集『一握の砂』を刊行する。

啄木の行動は新聞記者になった後もしばらくは変わらない。家族が上京するまでは、夜の街をふらつくことが生活の中心になっている。日記にはその様子を次のように残している。

4月8日 予は針と糸を買わずに、‘やめろ やめろ’という心の叫びを聞きながら、とうとう財布を出してこの帳面とタビとサルマタと巻紙と、それから三色スミレのはちをふたつと、5銭ずつで、買ってきた。予はなぜ必要なものを買うときにまで‘やめろ’という心の声を聞かねばならぬか？ ‘一文なしになるぞ’と、その声がいう：‘ハコダテでは困っているぞ’と、その声がいう！²⁶⁾

4月10日 もっと面白いところを求める心がいつそう強く予の胸にわきあがってくる。・・・いかにしてたれから金を借りようかと考えているときだ。・・・柔らかな、暖かな、まっ白なからだを抱きたくなる。²⁷⁾

一方で、常に何かに追い立てられているという焦りを感じ、次の日記の通り小説を書こうとするが書けないという悪循環に堕ってしまう。

4月17日 きょうこそ、必ず書こうと思って社を休んだーいな、休みだったから書くことにしたのだ。・・・予が自殺することを書くのだ。ノート3枚ばかりは書いた・・・そして書けなくなった！なぜ書けぬか？予はとうてい予自身を客観することができないのだ。いな、とにかく予は書けないー頭がまとまらぬ。²⁸⁾

4月17日 「断然文学をやめよう。」とひとりで言ってみた。「やめて、どうする？なにをやる？」「Death（死）！」と答えるほかはないのだ。・・・いかにして生活の責任の重さを感じないようにしようか？ーこれだ。金を自分が持つか、しからずんば、責任を解除してもらうか、ふたつにひとつ。おそらく、予は死ぬまでこの問題をしょって行かねばならぬだろう！とにかく寝てから考えよう。²⁹⁾

ついに耐えかねた家族が上京するにあたって、啄木は小説家をあきらめるようになる。そして、評論や短歌へと自身の価値を見いだせるようになっていく。例えば、日記には次のような短歌創作の心情を残している。

4月23日 歌を作る。予が自由自在に駆使することのできるのは歌ばかりかと思うと、いい心持ではない。・・・この間からの分を合わせて、12時ごろまでかかって、70首にして、“また問うなかれ70首”と題して快く寝た。³⁰⁾

ここに至って、これまでの自身の葛藤回避の在り方をようやく客観的に自己批判できるようになっていく。評論『きれぎれに心に浮かんだ感じと回想』では、自身のこれまでの生活が「二重生活」³¹⁾であったこと、人生において現実を忌避するような無責任な生活は許されないことなどを強調している。また、評論『弓町より（食うべき詩）』では、食うべき詩を生活に必要な詩という意味で用い、詩は現実生活に密着したものにこそ意義があると述べている。しかし、不幸なことにこれまでの負債は大きく、また家族全体に

病の影がちらつき始める。長男の死の背景にはやはり結核があったようである。

(7) 結核の病と死まで

翌年の明治44年に入って3行詩の詩人土岐哀果^{とき あいか}と知り合い、雑誌共同刊行を計画するが、慢性腹膜炎にて入院となり、その計画は頓挫してしまう。6月には妻節子が実家に帰郷しようとしたことを巡りトラブルがあり、妻の実家の堀合家と啄木は義絶する。さらに、妻とのトラブルから義弟郁雨とも義絶となる。啄木はこの頃より高熱が続き、床にふすことが多くなる。そして父は一家の窮状を見かねて再び突然家出する。

明治45年1月に母が咯血する。肺結核と診断され、さらに妻と啄木も同様に結核に罹患していることがわかる。そして3月に母が死去。金田一が一家の窮状を見かねて送金をしてくれたり、土岐の奔走で2つめの歌集の契約が出版社となされる。

しかし、4月13日に父、妻、若山牧水に看取られて、啄木は27歳でその生涯を終える。死後、第二歌集『悲しき玩具』が東雲堂書店より刊行される。節子は、啄木の亡くなった後、千葉で療養していた。その時に次女房江を出産し、函館の実家に2児を連れて戻る。しかし、その妻も1年後に他界する。母亡き後の2児は堀合家で養育され、後に京子は結婚して上京したが、24歳で急性肺炎のため死去。房江もまた結核を患い19歳の若さで亡くなる。父のその後の行動は不明であり、次女の嫁ぎ先で、78歳で亡くなっている。³²⁾ 大正2年に遺骨は函館立待岬に移され、一族の墓がそこに建立されている。

結核の病の進行から、啄木は新聞社の仕事と創作活動ともに滞るようになっていく。ここには、今までの「やりたくないから逃げてしまう」ではなく、「やるべきことがあるのにできない」という焦りと苛立ちが伴う。そうした苛立ちは、同居する家族へと向けられ、妻とのトラブル、妻の実家や親友との絶縁、父の失踪という極端な形となって現われてしまう。啄木の欠点はまさにここにある。常に自身の葛藤を他罰化し、解消しようとしてしまうその心性である。日記には、家族に苛立ちをぶつける様子が以下のように残されている。

1月1日　今日はとうとうまいってしまった。まず朝早くから雑煮がまずいといって皮肉な小言をいい、夕方に子どもが少し無理を言い出したときには、元日だから叱らずにおこうかと自分で思ったのが癪にさわって、かえってしたたかほっぺをなぐって泣かしてやった。・・・背中に熱があるのが絶えず意識に上がって、不愉快で不愉快で仕方なかった。・・・「元日だというのに笑い声一つしないのは、おれの家ばかりだろうな。」こう夕飯の席で言ったときには、さらでだに興のない顔をしていた母や妻の顔はみるみる曇った。³³⁾

1月19日　せつ子と京子を隣室へ母と一緒に寝かせることにした。せつ子はやっぱり咳がはげしいので、炊事は万事また母一人で行っていたが、その母が二三日前から時々痰と一緒に血を吐くようになった。・・・医者に見せたくても金がない。・・・私の家は病人の家だ、どれもこれも不愉快な顔をした病人の家だ。「おれは去年六月、とうとうお前が出てゆかないことになったときから、おれの家の方が皆肺病になって死ぬことを覚悟しているのだ。」こんなことを言ってみた。³⁴⁾

このような啄木の家族への言動を考えると、最終的には結核という病によって一家は崩壊してしまうことになるが、同時に啄木自身の家族、そして周りとの心の関係も崩壊してしまったのではないかと感じる。

2. 啄木の短歌にみる生と死の表現

啄木にとって、短歌はどのような意味をもっていたのであろうか。啄木は、新進気鋭の天才詩人というペルソナを自分の実力と信じ、現実検討のないままに野心を抱いて、詩人としての出立をする。しかし挫折し、次に小説家を目指すようになる。もう一度自己を試すべく、小説家として成功することを夢見て上京するが、「書けない自分」との葛藤を体験する。啄木は希死念慮、不眠、抑うつに悩まされるうちに、今まで自身が何も価値のないものと捨てていた短歌を作らざるを得なくなる。短歌は、啄木にとっては自身の栄達のために創作したものではなかった。それは無意識的な自己の内省作業

であり、一種の創造的退行であった。

啄木にとって短歌は「仕事」ではなく、自分を弄ぶ「悲しき玩具」であった。しかし同時にこの短歌によって初めて、啄木は自己の醜い面や弱い面という自己の真の姿に向き合うことができるようになる。

(1) 自己の内省としての短歌

過去の自分の在り様を啄木は短歌によって正直に描いている。自分が特別な人間であるという「うぬぼれ」の在り様、そして世間から評価されないでいることへの「怒り」と「放蕩」の数々を、短歌に以下のように表現している。

非凡なる人のごとくにふるまへる 後のさびしきは 何にかたぐへむ³⁵⁾

くだらない小説を書きてよろこべる 男憐れなり 初秋の風³⁶⁾

一度でも我に頭を下げさせし 人みな死ねと いのりてしこと³⁷⁾

実務には役に立たざるうた人と 我を見る人に 金借りにけり³⁸⁾

とある日に 酒をのみたくてならぬごとく 今日われ切に金を欲りせり³⁹⁾

その膝に枕しつつも 我がこころ 思ひしはみな我のことなり⁴⁰⁾

そして、啄木は短歌の中で、これまで他罰的に回避してきた自分の本当の姿に向き合うようになり、自分という対象を客観的にみつめることで、主体としての自己が浮かび上がってくる。それはこれまで避けてきた現実の自分であり、自身にとってそれを認めることはつらい体験でもある。

かなしきは 飽くなき利己の一念を 持てあましたる男にありけり⁴¹⁾

負けたるも我にてありき あらそひの因も我なりしと 今は思へり⁴²⁾

よごれたる手を見る　—　ちやうどこの頃の自分の心^{むか}に対ふがごとし。⁴³⁾

ようやく啄木は人生を自分の人生として主体的に生きることになる。仕事に対する思いも違いがみられ、また自尊心の在り様も変化がみられるようになる。ここに至って初めて、自分の嘘に対しての反省が「恥」という意識を通してもたらされる。

ころよく　我にはたらく仕事あれ　それを仕遂げて死なむと思ふ⁴⁴⁾

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ　花を買ひ来て　妻としたしむ⁴⁵⁾

あの頃はよく嘘を言ひき。平気にてよく嘘を言ひき。汗が出づるかな。⁴⁶⁾

(2) 啄木の生と死の表現

啄木は、1. で述べた通り、小説を書こうとして書けなくなった時期に、死への言及が多くなった。しかし、その死とは啄木の場合は現実逃避と同じ意味のようである。それゆえに実際には死に至らない。それでは次に啄木の「死」のイメージとは何であったのかを、短歌と日記を取り上げながらみていくこととする。

尋常のおどけならむや　ナイフ持ち死ぬまねをする　その顔その顔⁴⁷⁾

この短歌は、金田一の前で自殺未遂をした自分のことを自嘲気味に詠っているものである。ここでの「死」はあくまで狂言としての死であり、そこには相手の同情を得る目的が透けてみえる。一方、次の短歌は少々趣が異なる。

いと暗き　穴に心を吸はれゆくごとく思ひて　つかれて眠る⁴⁸⁾

暗い穴に吸い込まれていくように眠りに落ちるという内容の短歌だが、現実を忘れるにもっとも簡単かつ強力なものは「寝る」という行動である。た

だし、これは一時的回避であって、根本の解決にはならない。いずれ夢は覚めるのである。同じようなイメージを啄木は日記でも語っている。

明治42年4月26日 借りて質に入れてある時計を今月中に返してくれまいかという葉書だ。ああ！今朝ほど予の心に死という問題が直接に迫ったことがなかった。今日社に行こうか行くまいか・・・いや、いや、それよりもまず死のうか死ぬまいか？・・・そうだ、この部屋ではいけない。行こう、どこかへ行こう・・・湯に行こうという考えが起こった。それは自分ながらこの不愉快な気分には耐えられなかったのだ。先日行った時のいい気持が思い出されたのだ。とにかく湯に行こう。そしてから考えることにしよう。そして予は台町の湯屋に行った。その時までは全く死ぬつもりでいたのだ。湯の中は気持ちがいい。予はできるだけ長くそこにいようと思った。ここさえ出れば恐ろしい問題が待ちかまえていて、すぐにも死ぬか何かせねばならぬようで、あたたかい湯につかっている間だけが自分の身体のような気がした。予は長くいようとした。しかし案外に早く身体も洗わさってしまう。どうしよう！上がるか？それとも少し入っていようか？上がったら一体どこに行こう？（中略）出ようか出まいかと考えていると一死のうか死ぬまいかという問題が、出ようか出まいかの問題にうつって、ここに予の心理状態が変化した。水をかぶって上がった時、予の心はよほど軽かった。⁴⁹⁾

はじめは借金の返済を迫られたことに動揺し、「死」というイメージが啄木を襲う。しかし、それが出社するかしないかの不安に転移し、「ここにじっとしてられない」という焦燥感に襲われ、それがそのまま部屋を出るという行動に移され、あろうことか風呂屋に行くという行動に移されてしまう。「借金をどうやって返すか」というそもそもの問題がどんどんずらされていき、最後には湯船からいつ出ようかというどうでもいい問題へと矮小化されていく。これはもちろん、啄木が葛藤を回避するために無意識的に行った行動であろう。なぜなら最終的に啄木は心が軽くなっているのである。しかし一方で本質的な問題は何も解決していない。こうした「死」の独特のイメージは他の日記にも見受けられる。そこには、「安心」というキーワードが重ねられている。

明治42年4月10日　しかし予は疲れた！予は弱者だ！1年ばかりのあいだ、いや1月でも、1週間でも、3日でもいい、神よ、もしあるなら、ああ、神よ、私の願いはこれだけだ、どうか、身体をどこか少しこわしてくれ、痛くてもかまわない、どうか病氣さしてくれ！ああ！どうか・・・・・・・・・・・・・・・・

真白な、柔らかな、そして身体がふうわりとどこまでも—
安心の谷の底までも沈んでいくような布団の上に、いや、養老院の古畳の上でもいい、なんにも考えずに、(そのまま死んでも惜しくはない！) ゆっくりと寝てみたい！手足を誰か来て盗んで行っても知らずにいる程 ゆっくり寝てみたい！⁵⁰⁾

つまり、啄木にとって「病氣」も「死」もほとんど「寝る」とことと同義なのである。この「寝る」という行為は、現実逃避の極みといっているのではないだろうか。「深い穴」にしろ、「布団」にしろ、また「安心の谷」にしろ、これらはみな母胎の中を思わせる。母胎とはそもそも胎児が万能感に浸れる揺りかごであり、そこに回帰するということは、「生まれない」ことの願望、つまり現実を生きたくないということを啄木が強く感じていたことを示している。それゆえに、現実との接触は常に啄木にとって脅威とならざるをえない。

こうした現実逃避の願望を抱える一方で、啄木は、小説を断念した辺りから現実と向き合うようになり、評論などを通して徐々に現実世界に根を下ろし、「真に真面目に」現実を生き始める。それは家族を養わなければならないという外側からの枠にはめられたことによって強制的に作動した「生」である。

遺作となる『悲しき玩具』には、啄木自身の生活の在り様が現実感を伴い詠われている。それゆえに啄木の人間としての弱さが以下の歌にもよく表現されている。

本を買ひたし、本を買ひたしと、あてつけのつもりではなけれど、妻に言ひてみる。⁵¹⁾

旅を思ふ夫の心！ 叱り、泣く、^{つまこ}妻子の心！ 朝の食卓！⁵²⁾

人とともに事をはかるに 適せざる わが性格を思ふ寢覚めかな。⁵³⁾

友われに飯を与えき その友に背きし我の ^{きが}性のかなしき⁵⁴⁾

この「我の性」によって啄木は常に周りとの関係を親和的に構築できず、軋轢を生じさせてしまう。啄木は、自分の才能を無条件に受けとめ、現実の軋轢から自分を守ってくれる存在としか関係を結べない。金田一しかり、郁雨しかり、彼らは啄木の才能を認め、しかも無条件に彼の味方になっている。

こうした庇護、いいかえれば「母胎」のもとにあれば、啄木は「安心」していられるのであるが、同時に真の創作がそこから生まれたかどうかは疑問であろう。彼の後世の評価は彼が自分で評価している小説ではなく、彼が「遊び」として晩年までまったく評価にしていなかった短歌だったことがそれを証明している。最後に、啄木の短歌2首を取り上げる。

その親にも、親の親にも似るなかれ—かく^な汝が父は思へるぞ、子よ。⁵⁵⁾

何思ひけむ—^{おもちゃ}玩具をすてて、おとなしく、わが側に来て子の座りたる。⁵⁶⁾

ここには、石川一として生まれてきたことの不幸、そして人として真面目に生きてこられなかった自分への後悔が語られている。それと同時に、そんな自分でも我が子が自分に寄り添ってくるという人間に対する深い感嘆と淋しさが詠われているように思われる。

(リポジトリ公開にあたって、本文中の啄木の生涯に関する事実部分について、一部修正を加えた。)

注

- 1) 岩城之徳（1979）513-589 頁参照。
- 2) 福田清人・堀江信男（1966）8-116 頁参照。
- 3) 福田清人・堀江信男（1994）14 頁参照。
- 4) 啄木ははじめ軍人を志望し、後に海軍大將になる及川古志郎のグループに入って勉強会に参加する。
- 5) 後にアイヌ語研究に従事した言語学者。啄木より4歳年上。啄木上京後、友として行動を共にし、経済的にも精神的にも援助者として啄木を支え続ける。この頃金田一はすでに『明星』に短歌を投稿している。
- 6) 明治33年に与謝野鉄幹が創刊した浪漫主義短歌の雑誌。同じ時代に北原白秋や若山牧水らを輩出した。
- 7) 福田清人・堀江信夫（1994）33-34 頁参照。郷土出身の教師と他県出身の教師との折り合いが悪く、他県出身教師がすぐに辞めてしまうことで、担任が常に流動的なことを日ごろ生徒たちが不満に感じていた。校長に郷土出身の教師の解雇を求めて嘆願書を生徒が出し、生徒たちがストライキを実行した。啄木は首謀者ではなかったが、3年生のストライキ活動に参加している。結果として、教師の大量異動が行われたが、同時に生徒への管理しめつけが厳しくなり、特に試験でのカンニング等への厳罰姿勢が強まった。
- 8) 石川啄木（1980）「林中書」『石川啄木全集第四巻 評論・感想』95 頁参照。
- 9) 文語定型詩集。人は愛を梯子として現実を超越し、天界と一体化するという内容の愛の賛歌集。節子との婚約が成立していく過程に作られている。
- 10) 福田清人・堀江信男（1994）58 頁参照。
- 11) 啄木が代用教員として教鞭を執ったのは、明治39年4月からの1年間に浜民尋常高等小学校で、北海道移住後の明治40年の6月から9月までの4カ月間に函館市弥生尋常小学校である。
- 12) 石川啄木（1978）「洪民日記」『石川啄木全集 日記Ⅰ』69 頁参照。
- 13) 石川啄木（1978）100 頁参照。
- 14) 石川啄木（1980）「林中書」『石川啄木全集第四巻 評論・感想』107 頁参照。
「すなわち、教育の目的は、天才を養成することである。・・・それから第二の目的は、かかる人生の支配者に服従し、かつ尊敬する事を天職とする、健全なる民衆を育てることである。・・・」
- 15) 啄木はこの函館で宮崎郁雨と出会う。宮崎は函館の文芸社を通して啄木と知り合い、啄木が上京中、函館に残った石川一家の面倒をみていた。その後啄木の妻節子の妹と結婚し、啄木とは義理の兄弟となる。以降も常に啄木と啄木一家を支え続け

た。

- 16) 石川啄木 (1978) 「明治四十一年日誌」『石川啄木全集第五巻 日記Ⅰ』239 頁参照。
- 17) 石川啄木 (1978) 239 頁参照。
- 18) 石川啄木 (1978) 240 頁参照。
- 19) 『菊地君』、『病院の窓』、『母』など。
- 20) 石川啄木 (1978) 「明治四十一年日誌」『石川啄木全集第五巻 日記Ⅰ』287 頁参照。
- 21) 石川啄木 (1978) 287 頁参照。
- 22) 石川啄木 (1978) 265 頁参照。
- 23) 石川啄木 (1978) 289 頁参照。
- 24) 石川啄木 (1978) 307 頁参照。
- 25) 社会主義者宮下太吉らによる明治天皇暗殺計画が発覚し、政府は社会主義者、無政府主義者の弾圧を強め、社会主義者の幸徳秋水などが処刑された事件。石川啄木はこの事件に大きな関心を持ち、秋水の手紙などを極秘に入手し、『時代閉塞の状況』や『A LETTER FROM PRISON』などを執筆した。
- 26) 石川啄木 (1979) 「ローマ字日記」『石川啄木全集 日記Ⅱ』123 頁参照。
- 27) 石川啄木 (1979) 130 頁参照。
- 28) 石川啄木 (1979) 144 頁参照。
- 29) 石川啄木 (1979) 145 頁参照。
- 30) 石川啄木 (1979) 152-153 頁参照。
- 31) ここでいう「二重生活」とは、家族を養わなければならない立場である自分と、家族を省みないで放蕩生活をする自分という意味。
- 32) 湯原公浩 (2012) 147 頁参照。
- 33) 石川啄木 (1979) 「千九百十二年（明治 45 年）日記」『石川啄木全集 日記Ⅱ』235 頁参照。
- 34) 石川啄木 (1979) 240-241 頁参照。
- 35) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.54」『新編 啄木歌集』31 頁参照。
- 36) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.145」54 頁参照。
- 37) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.94」41 頁参照。
- 38) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.56」31 頁
- 39) 石川啄木 (1993) 『一握の砂 No.103』41 頁参照。
- 40) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.402」124 頁参照。
- 41) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.43」28 頁参照。
- 42) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.349」111 頁参照。
- 43) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.31」174 頁参照。
- 44) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.20」22 頁参照。
- 45) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.128」49 頁参照。

- 46) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.82」 187 頁参照。
- 47) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.81」 38 頁参照。
- 48) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.19」 22 頁参照。
- 49) 石川啄木 (1979) 「ローマ字日記」『石川啄木全集 日記Ⅱ』156-157 頁参照。
- 50) 石川啄木 (1979) 132-133 頁参照。
- 51) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.6」『新編 啄木歌集』168 頁参照。
- 52) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.7」 168 頁参照。
- 53) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.64」 182 頁参照。
- 54) 石川啄木 (1993) 「一握の砂 No.314」 102 頁参照。
- 55) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.157」 206 頁参照。
- 56) 石川啄木 (1993) 「悲しき玩具 No.161」 207 頁参照。

引用参考文献

- 石川啄木 (1993) 『新編 啄木歌集』久保田正文編 岩波文庫。
- 石川啄木 (1978) 『石川啄木全集第四巻 評論・感想』金田一京助ほか編 筑摩書房。
- 石川啄木 (1978) 『石川啄木全集第五巻 日記Ⅰ』金田一京助ほか編 筑摩書房。
- 石川啄木 (1979) 『石川啄木全集第六巻 日記Ⅱ』金田一京助ほか編 筑摩書房。
- 石川啄木 (1979) 『石川啄木全集第八巻 啄木研究』金田一京助ほか編 筑摩書房。
- 岩城之徳編 (1979) 「伝記的年譜」『石川啄木全集第 8 巻啄木研究』筑摩書房、513-589 頁。
- 福田清人・堀江信男編著 (1966) 「第一編石川啄木の生涯」『人と作品 5 石川啄木』清水書院、8-116 頁。
- 湯原公浩編 (2012) 『別冊太陽 石川啄木 漂泊の詩人』平凡社。

Takuboku Ishikawa: Expressions of Life and Death in *Tanka*

by Amane FUKUDA

Takuboku Ishikawa was a poetic genius during the Meiji Era. He showed outstanding intelligence from childhood. He displayed talent as a poet in his teenage years and moved to Tokyo, intending to become a novelist. In this, however, he did not succeed and experienced a serious setback. During this time of living in poverty, however, he produced his revolutionary collection of poems, included in *A Handful of Sand*. Yet, at the young age of 27, he died of tuberculosis. In this article, Takuboku Ishikawa's life will be reviewed, focusing on how his psychological conflicts developed. The author also discusses how these conflicts influenced Ishikawa's works through an examination of his diaries and *tanka*.

The results of this study show that Ishikawa did not write *tanka* for his own personal benefit. For him, *tanka* were reflections of his subconscious self, a type of creative regression. In his *tanka*, he honestly wrote about his existence. That is, the *tanka* are an "egotistic" expression of himself as a special person, and his feelings of anger and rebellion that he was not esteemed by the world. Through his *tanka*, Ishikawa was able to face his weak and ugly sides for the first time.

During the period when Ishikawa was unable to write novels, there were many references to death in his work. However to him, death may have held the meaning of an escape from reality. For Ishikawa, illness and death were almost the same as sleep. The action of sleeping could be considered an extreme escape from reality. However, after Ishikawa abandoned novels, he came to face reality; he gradually became grounded to the real world through critique, and he began to seriously confront the circumstances of his life. However, in the middle of this transition, he died of an illness.

